

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月16日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530959

研究課題名（和文） アート教育の協働的な組織化における教師の役割と育ち：教授学習過程論的分析

研究課題名（英文） The role and learning of the teachers in the collaborative organization of the art education curriculum: An analysis focusing on the teaching-learning process

研究代表者

宮崎 清孝（MIYAZAKI KIYOTAKA）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：90146316

研究成果の概要（和文）：

3年間にわたり、1幼稚園で、想像遊びによるアートへの動機付けと、プロのアーティストのワークショップを特徴とするアート教育カリキュラムの開発をおこなった。そのデータを用い、外国の共同研究者と共にアート教育理論の開発をおこなった。子どもがアート制作時に経験する探求活動に複数の種類があることが発見された。保育者とアーティストの協力関係を豊かにすることが必要であるが、複数の問題点があることが分かった。

研究成果の概要（英文）：

An art education curriculum has been developed in these 3 years, in which the art workshop led by the professional artists is the main activity and children commit imaginative play activities to motivate themselves to the art activities. Based on the collected data, the researcher has developed a theoretical model on the art education with the foreign collaborative researchers. The result showed that there are several types of explorative activities children commit in their art activities. It also showed that there are the necessity and difficulties to develop the productive collaboration between the artists and the teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
23年度	700,000	210,000	910,000
22年度	1,000,000	300,000	1,300,000
21年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：認知心理学・教授学習過程論

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：アート教育、カリキュラム構成・開発、アクションリサーチ、協働的学習、教師の学習、多声的エスノグラフィー

1. 研究開始当初の背景

いわゆる知識詰め込み主義の教育がますます強調される中で、アート教育は片隅に追いやられていく一方である。しかし一部にはこれまでの、教室の中で絵を描かせるだけの「美術教育」から、子どもの造形活動に焦点

を当てたり、あるいはアーティストが積極的に学校場面に入るなど、新たな方向への試みも多い。これらの試みの背景には新しいアート観、学習観が存在する。アートを活動として捉えること、学習を、子どもと大人の協働的な活動として捉えることである。この方向

でのアート教育観の理論的な基礎をより明確にするため、研究代表者は幼稚園の現場で幼稚園と協力しながら教育カリキュラム作りに参加し、子どもと大人の関わりの観察をおこなう研究を続けてきた。科研費研究についても、平成 17・18 年度、平成 19-20 年度と基盤(C)の研究を積み重ねてきた。研究はヴィゴツキーに発する教育に対する文化歴史的アプローチの立場に立つものであり、特にスウェーデンの演劇教育者 Lindqvist の play pedagogy の考えと、それをさらに展開したフィンランドの教育心理学者 Hakkarainen の narrative learning の考えをヒントにして、また実際にも Hakkarainen 等との共同研究としておこなってきた。

この 4 年間の研究、特に平成 19-20 年度の研究を通して、実際の保育カリキュラムの形については、我々独自の形をかなり固めることができたその中で、しかしまだ解決されていない問題が残り、また新たな研究の関心も生まれてきた。このような問題関心を背景として、今回の研究を計画した。

2. 研究の目的

今回は特に次の諸点を目的として研究をおこなった。

(1)探求としてのアート活動の性格を明確にする:ここではアート創作を探求の活動だと考えている。この点について、研究代表者のこれまでの研究、とりわけ平成 19-20 年度の研究で、いくつかのヒントは得られてきた。今回これをより明確にしていく。なおアート制作での子どもたちの探求の様子を明確にすることは、以下の目的を達成するための前提であり、手段となる。

(2)保育者が日常の実践で想像遊びを子どもと発展させるためにどのような方略を用いるか:ここで開発されているカリキュラムの特色は、

- ・年間テーマを決め、そこから保育者と子どもが想像遊びを展開し、それがアート活動へ動機付けと資源を提供することを期待する。
- ・プロのアーティストを招聘し、1 学期、及び夏休みに子どもと共にアートワークショップをおこなう、

という 2 点である。ここで、積極的に想像遊びを創り出すために、保育者たちがどのような活動をおこなっているのか、明確にしていく。

(3)ワークショップにおけるアーティストのアート活動に、保育者がどう関わるか。それによって保育者とアーティストがどう変わっていくか:これは子どもと関わる、専門を異にする大人たちの協働がどのように達成されているのか、という問題と、その中で大人の側の学習がどのように進行するのか、と

いう問題である。

(4)これらの諸点についての外国の実践・研究との比較:外国人共同研究者(アメリカ、スウェーデン、フィンランド、セルビア)との協働研究として、多声的エスノグラフィーの手法を用いて、似た思想による外国の実践・研究との比較研究をおこない、想像とアートについての我々の理論の独自性と、共通性を明確にする。

3. 研究の方法

本研究のメインは、協力幼稚園との協働作業によるアクションリサーチである。なお副次的に、日本国内における他の学校での特色あるアート教育の実践をいくつか観察の対象としている。また外国人共同研究者とのネットを通しての、また対面での討論、及び外国での教育実践の観察をおこなった。以下、主としてメインの協力幼稚園での研究の方法について記す。

研究協力幼稚園:岐阜県下の一私立幼稚園であり、アート教育に大きな関心を持つ。その年長児 3 クラスが実験的な保育カリキュラムのメインの対象であり、その中の 1 クラスが観察の主たる対象となる。

保育カリキュラムの構成:これまでの研究に基づき、2、研究の目的の(2)に述べたような特徴を持つ保育カリキュラムを設定した。3 年間を通し、前の年度の結果を見ながら修正していったが、大きな変化はなかった。テーマと招聘アーティストについては、幼稚園側が主となって前年度中に決定した。

データ取得・分析の方法:基本は保育活動の観察とビデオによるその記録である。夏のワークショップ時を含め、毎年 10 回程度幼稚園を訪問し、観察、記録した。なお観察には、研究代表者だけでなく、その補助として指導する大学院生も参加した。子どもたちの活動の行動分析、また子ども、保育者、アーティストの会話について、会話分析をおこなった。また、アート活動については制作過程の作品の変化を取るため、デジタルカメラによる画像を取得した。さらに、アーティストと保育者に対して半構造化インタビューをおこない、それについて内容分析をおこなった。

なお本幼稚園以外での研究に関して、他の学校については、特に九州の中学校で夏季におこなわれた小学生のための絵画教室に参加し、観察した。また当該中学校での中学生の授業について 1 回観察し、また制作された作品について画像を入手し、分析の対象とした。

4. 研究成果

以下ではメインの幼稚園での研究結果について、まず 1 年ごとの保育カリキュラムの進行について、次に 3 年間を通して得られた

研究目的に対応する結果について述べる。

(1)平成 21 年度研究

この実験的保育では、まず年間のテーマを決定する。平成 21 年度は「光・風」であった。なお、これまでの研究からテーマは抽象的なものとし、それからいろいろな方向に想像遊びを展開できるものとしている。また招聘アーティストは建築をバックグラウンドとするインスタレーション・アーティストの宮元三恵(当時東京藝術大学助手)であった。夏季ワークショップでは Milky Way と呼ぶ作品を作った。

①子どもたちの展開した想像の世界

園全体のテーマから各クラスの想像世界へと展開するやり方として、当年度では、
・クラス担任がテーマから自由に連想し、自分が興味を持っていろいろな発想できる話題を用意し、
・それを子どもにぶつけながら、子どもが興味を持つものへと決めていく、

というやり方を取った。これ以降、平成 23 年度に至るまで、このやり方でおこなわれた。観察したクラスでは、「鳥」が一つのモチーフとなった。これはクラス担任の保育者も興味があり、またたまたまクラスの近くに鳥の巣が発見され、卵が孵り、子どもたちも大きな関心を示したことによる。鳥に関する絵本や図鑑が用意され、子どもたちは鳥について調べていった。孵った雛に名前を付け、それについてのいろいろな想像が子どもたちの中で展開した。さらに 1 学期中におこなわれた招聘アーティストのワークショップで星座を描くことを経験し、星座の世界と鳥の世界が結びついた想像のもの語りを子どもたちは発展させ、これが夏休み以降も続けられた。

②招聘アーティストのワークショップ活動について

6 月 2 日と 7 月 14 日にそれぞれ 1 日のワークショップが、さらに 8 月 5-7 日、および 8 月 20 日に夏季のワークショップがおこなわれた。

6 月 2 日ははじめ星座の図の上にトレーシングペーパーを置き、その上に子どもたちが何かをイメージして描き込むという構想だったが子どもたちにとって困難であり、保育者側よりの提案で子どもたちがまず何か好きなものを描き、そこに星を入れて星座状にしていくという作業になった。7 月 14 日には大きな段ボールに自由に穴を開け、それを星として、そのたくさんの穴=星から星座を読み取り、描く、という構想であったが、これも子どもには困難であり、保育者側からの提案で、むしろ大人が積極的にいろいろな“星座”を指摘し、描いてみせるという活動とな

った。

8 月 5-7 日がメインの活動であり、宮元が Milky Way と名づける作品を作った。園庭にポールをたくさん立て、子どもたちが自分の選んだポール間に銀のテープを貼る、というものであった。8 月 20 日にはポール間に別途大人が用意しておいた布製のトンネルをいくつも通し、子どもたちがトンネルをくぐる活動をおこなった。

6,7 月のワークショップにあったように、ここではアーティストと保育者の間で作品作りの具体をめぐってやりとりがあり、その結果としての変化があった。8 月の Milky Way 自体については宮元が年度の最初に立てた初期構想とそう変わらなかったが、ここでも背後にはアーティストと保育者の間の対立、討論があった。アーティストと保育者の間の関わりについての一つの典型例であり、この点については後に述べる。なおこの、宮元の初期構想とその変化については、西川(2010)にその分析がある。

(2)平成 22 年度研究

当年度の年間テーマは「におい・からだ・たべる」であった。招聘アーティストは匂いをモチーフにさまざまな活動をおこなっているインスタレーション・アーティスト井上尚子であった。夏季ワークショップでは「くんくんウォーク」という活動をおこない、「くんくんノート」という作品を作った。

①子どもたちの展開した想像の世界

観察したクラスで、保育者は 4 月に「匂い」に関する活動をおこない、子どもたちの関心を「匂い」に向けようとしたが子どもたちは関心を示さなかった。5 月中に、子どもたちが机で造ったトンネルから身体の内蔵を連想し、子どもたちに内蔵についての知識を提供すると子どもたちも関心を示し、内蔵を一つのモチーフとすることになった。その後子どもたちはさらに血液、赤血球や白血球に、さらにはばい菌にも興味を持ち、赤血球やばい菌になって遊ぶことをするようになり、それが夏休み以降も続いた。

②招聘アーティストのワークショップ活動について

5 月 27 日、6 月 27 日に 1 日ワークショップがおこなわれた。なお 5 月 26 日には翌日のための材料準備を兼ねて、保育者のためのワークショップをおこなった。これは子どもがワークショップと豊かに関わられるためには、保育者も自分でワークショップでの活動を経験し、楽しむことが重要だ、との考えに基づくものであり、23 年度にも同じようにおこなわれた。夏のワークショップは 8 月 4 日から 6 日までおこなわれた。

5 月のワークショップでは、前もっている

いろいろな材料を入れてあるボトルをたくさん用意し、その匂いを嗅いで当ててみる、という活動をおこない、次にその匂いから連想される絵を描く、というものであった。6月のワークショップでは前回使ったボトルの中身と、ボードに書いたその名前を対応させる活動をおこなった。さらに材料を足し、子どもたちそれぞれが自分の匂いボトルを作った。

8月のワークショップでは園内を回り、自分の気に入った匂いのするものを採集してボトルに詰め、クラスに帰ってきてその匂いを嗅ぎながら「くんくんノート」という作品を作った。

(3)平成 23 年度研究

当年度の年間テーマは「おる・つなぐ・ことば」であった。招聘アーティストはテキスタイル・アーティストの相川恵（女子美術大学）であった。夏季ワークショップでは子どもたち各自がメリノボールを、またグループ作品としてプラスチックのラティスにさまざまな素材を織り込んだテキスタイルを作った。

①子どもたちの展開した想像の世界

観察したクラスでは、若い保育者がテーマからの展開に苦労していた。そのため園の実践指導者の園長から、テーマにこだわらずに考えるよう示唆があり、たまたま子どもたちの間で話題になった台風の話から、天気、特に「雲」が主たるモチーフとなっていた。「雲」研究所がクラスに作られ、雲スコープで雲について調べる、といった想像遊びがおこなわれた。

②招聘アーティストのワークショップ活動について

6月25日、7月9日に1日ワークショップがおこなわれた。6月25日には、プラスチック製のラティスに、いろいろな材料を織り込んで作品を作る活動がおこなわれた。7月9日には相川が染色したさまざまな色のメリノウールから球を作る活動がおこなわれた。

夏季ワークショップは8月24日から26日にかけておこなわれた。ここではまず、6月に作った各自の作品に新しいラティスを加えて、その土台の上にさらに新しい材料を付け加え、さらにグループ毎にメンバーの作品を結合した上で新しい材料を付け加え、グループ作品として完成させた。またメリメボールを2個作った。

(4)3年間を通しての主要な見

①探索活動としてのアート

3回にわたるアートワークショップ、および各年度のアートの時間における作品制作過程の分析を通して、様々な探索活動が確認

された。平成 21 年度のワートワークショップの場合、Milky Way について子どもが直接に関わった場面は、ポールに銀色のテープを貼っていくところであり、ここで子どもたちはポールの選択、テープの張り方について、一定程度の探索をおこなっていた。これは<作品上での探索過程>の一つの例である。

平成 22 年度の場合、なおいについて直接には探索過程を確認できなかった。だがそこから紙の上に絵を描いていく過程において、子ども集団の協働的な探索過程が認められた。ここでの協働的な探索は隣り合っている子どもたちがお互いの絵に干渉しあうことによって生じた偶発的な過程だったが、子どもたちが教室内で集まってアート制作をやる場合にはよく見られるものでもある。そこで子どもたちは、自分の作品に他の子どもが描き込んだ絵の「意味を取り込み」、自分の絵を発展させる契機にしていった。一般的に模倣と呼ばれる現象に近いが、より積極的な契機を持つものであり、区別されるべきであろう(宋・宮崎、2011)。

もっとも典型的な探索活動が見られたのは、2011 年度の、プラスチック製ラティスへ様々な材料を織り込んで作ったテキスタイル制作の事例である。ここでは織り込む材料の選択、織り込む位置、折り込み方などに探索がみられた。かつ、これは単に<作品上の探索>に留まるものではなかった。作業時の子どもたちの発言から、織り込む際に様々な想像的物語を子どもたちが作り出していることが明らかになった。かつ想像世界自体が、「雲の世界」になったり「ミミズの世界」になったりと変化をしていた。ここでは<作品上の探索>に重なる形で、<想像世界の探索>が存在した。

②子どもの想像遊びを展開させるための保育者の働きかけ

- ・テーマから触発され、自分でも興味ある題材を準備する。
- ・子どもにそれをぶつけ、発展しなければ躊躇なく変えていく。

というやり方が平成 21 年度には確立したと考えた。だが平成 23 年度にはそれでもなかなかうまく展開しなかった。一つの理由は、この年の保育者がまだ経験の浅いためであった。しかし“興味深い”ということがどういうことを意味するのか、子どもの側の反応の中にある可能性をどう“聴く”のかについて、さらに探求していかなければならないと考えられる。この点で、小学校以上の学校における「教材解釈」の技法(宮崎、2009)により学ぶことが今後の課題である。

③保育者とアーティストとの対話

外部よりアーティストを招聘して子どもの学びを引き起こそうとする場合、保育者と

アーティストは協働をしていく。この協働は、内部に対立、葛藤を含み、またその中で両者が変化・学習していく過程であり、その意味で対話的な過程である。今回平成 21 年度での保育者とアーティストの関係と 23 年度のそれとが対照的であり、この問題についての多くの示唆をえることができた。

すでに上で述べたように、平成 21 年度には保育者とアーティストの間でいろいろな対立があった。1 学期の 1 日ワークショップではアーティストの要求するものが、保育者から見ると子どもにとっては難しいと感じるものだった。またアーティストから見ると、園の活動で子どもたちが展開している想像遊びは自らの構想に入れにくく、園の活動とは独立にアート活動を展開することを願っていた。一方保育者からすれば、園での想像遊びの活動抜きで、子どもたちにアート活動への動機付けをすることが困難であると感じていた。

他方平成 23 年度の場合、この種の対立・葛藤は存在しなかった。アーティスト側からは、保育者側から自由にやらせてもらったという感想があった。逆に保育者側からは、アーティストが彼らのヒントをどんどん取り入れて、柔軟に構想を変えてくれている、という感想があった。

この違いの一つの理由はむしろアーティストの個性だろう。だがそれに還元されない、普遍性を持った論点も存在する。領域を異にする専門家が会おうとき、対話がどのように生産的になるか、という論点である。そこに存在する要因として、子どもの見方、アート活動についての見方の 2 つが最低でも考えられる。この場合、子どもの見方については保育者がより知っており、アート活動についてはアーティストがより知っている、と単純にいうことはおそらく許されない、というところから議論を進めていくことが必要だろうと思われる。しかし、この点については今後の課題である。

④外国の似た実践・研究との比較について

外国の似た実践・研究との比較を多声的エスノグラフィーの手法を用いておこなう予定であった。そのため、平成 19 年度の研究で得たビデオデータを編集し、英語の字幕を付けたものを、まず手始めに外国人共同研究者に送り、意見交換を行った。その結果については平成 22 年度に Marjanovic-Shane, Ferholt, Nilsson, Rainio, & Miyazaki(2010)で発表した。しか外国人共同研究者の関心は、想像遊びやアートについての考え方というよりも、初等教育制度の違いや、保育者のあり方の違いによって出てくる保育活動の違いに向かい、当初の目的を達成することはできなかった。ただし討論の中で、イタリアの著

名なアート教育運動である Reggio Emilia との比較が重要であることが明らかになり、今後の課題となった。

Marjanovic-Shane, A. Ferholt, B., Nilsson, M., Rainio, A. P., & Miyazaki, K. 2010 Taping and talking about playworlds. Paper presented at the 31st Annual ethnography in education research forum. 2010 年 2 月 27 日, フィラデルフィア, アメリカ合衆国.

西川恵 2010 スケッチの変化からみた協働的なアート創造過程. 早稲田大学大学院人間科学研究科 2009 年度修士論文.

宋明旋、宮崎清孝 2011 模倣と「意味の取り込み」による子どもの創造的な描画の展開. 日本教育心理学会第 53 回大会論文集, p. 372. 2011 年 7 月 25 日, 札幌.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1, Miyazaki, K. 2011 Encountering another dialogic pedagogy: A voice from japan. *Journal of Russian and East European Psychology*, vol. 49, no. 2, March–April 2011, pp. 36–43. 査読あり.

2, 宮崎清孝 2009 芸術教育. 児童心理学の進歩 2009 年版. pp. 164 - 184. 査読あり.

[学会発表] (計 13 件)

1, Miyazaki, K. 2011 Playworlds as the arena for the explorative activity of art and play. Paper presented at the International Society for Cultural and Activity Research Rome, 2011 年 9 月 9 日. ローマ, イタリア. 査読あり.

2, 宋明旋、宮崎清孝 2011 模倣と「意味の取り込み」による子どもの創造的な描画の展開. 日本教育心理学会第 53 回大会論文集, p. 372. 2011 年 7 月 25 日, 札幌.

3, 宮崎清孝, 井上尚子, 佐木みどり, 東村知子, 野村幸弘 2011 子どもがアートと対面するとはどういうことか-幼稚園でのアートワークショップの発達の意義. 日本発達心理学会第 22 回大会論文集, pp. 36 - 37. 2011 年 3 月 27 日, 東京.

4, Rainio, A. P., Marjanovic-Shane, A. Ferholt, B., Miyazaki, K., & Nilsson, M. 2010 Playworlds pedagogy: Creativity and imagination in education. Paper presented at the 4th Finnish conference on cultural and activity research. 2010 年 5 月 29 日. ヘルシンキ, フィンランド. 査読あり.

5, 宮崎清孝, 宮元三恵, 佐木みどり, 野村幸弘 2010 アートにとって子どもがいる意味-アーティストにとっての幼稚園でのワ

ークシヨップ経験. 日本発達心理学会第 21 回大会論文集, pp. 30-31. 2010 年 03 月 27 日, 神戸.

6, Marjanovic-Shane, A. Ferholt, B., Nilsson, M., Rainio, A. P., & Miyazaki, K. 2010 Taping and talking about playworlds. Paper presented at the 31st Annual ethnography in education research forum. 2010 年 2 月 27 日, フィラデルフィア, アメリカ合衆国.

7, Miyazaki, K. 2009 Teacher as the author of polyphonic novel: Bakhtinian analysis of a Japanese view on dialogic education. Paper presented at the Second International Interdisciplinary Conference on Perspectives and Limits of Dialogism in Mikhail Bakhtin, Stockholm University, ストックホルム, スウェーデン. 2009 年 6 月 4 日. 査読あり.

8, Miyazaki, K. 2009 Literature as the arena for imaginative education: A view from Saitou pedagogy. Paper presented at 7th International Conference on Imagination and Education, ヴァンクーバー, カナダ. 2009 年 7 月 17 日.

[図書] (計 3 件)

1, Marjanovic - Shane, A., Ferholt, B., Miyazaki, K., Nilsson, M., Rainino, A., Hakkarainen, P., Pesic, M., & Beljanski - Ristic, L. 2011 Playworlds: An art of development. pp.3 - 32. In C. Lobman, & B. O'Neill (Eds.), Play and performance: Culture studies, vol.11. MD: University Press of America.

2, Miyazaki, K. 2010 Teacher as the imaginative learner: Egan, Saitou, and Bakhtin. pp. 33 - 44. In K. Egan, & K. Madej(Eds.), Engaging imagination and developing creativity in education. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.

3, 宮崎清孝 2009 子どもの学び教師の学び-斎藤喜博とヴィゴツキー派教育学. 一荃書房. 254 ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 清孝 (Miyazaki Kiyotaka)

早稲田大学人間科学学術院 教授

研究者番号 : 90146316

(